

伴信友の今昔物語集研究

酒井憲二

- 一 はじめに
- 二 近世における今昔物語集研究
- 三 伴信友の今昔物語集研究
- 四 鈴鹿本（奈良本）との値遇とその批校——卷十二——
- 五 鈴鹿本との再会——卷二十七・二十九——
- 六 その出典研究
- 七 その注釈研究
- 八 その語彙研究——今昔物語集異訓字——
- 九 まとめ

一

今昔物語集の研究は、古典大系本の完成によってようやく緒についたところである——筆者はかつて、このように書いた。^{*1} おそらく今日においても基本的認識としては容認されるところであろう。たしかに研究者の層は厚みを増し、関係論文も年々その数を加え、問題作も二、三にとどまらない。今昔研究はかつて無い盛況をきわめているものゝごとくである。しかし、ごく基礎的な、作者や成立の問題をはじめ、語学的な面でも文学的な面でも解明されるべき課題はあまりにも多い。しかも、いかにも大部の書であるためか、ことにその全体像の把握という点になると、一層、いまだ

しの感が深い。

一般の認識も正確を欠く場合が少く無いようである。たとえば、中学・高校の教科書の類や、日本の代表的な国語十百科辞典と自認するものまでが、「一二〇〇余の説話を収め」と、きわめて初歩的な誤りを冒してまかり通っている。時には啓蒙的な専書においてさえ然りである。おそらく全三十一巻揃った原本の存在を仮定しての推定論が實在論にすり代えられたものであるが、明らかな伝写の間の欠落は別として、多くの欠巻・欠話や欠文が、ほとんど確実に当初からのものと認められるとの意味で今昔物語集の未成的終末を予想せざるを得ない今日、千二百余という話数はナセンズであろう。^{*2} このような誤謬は、学校教育で扱われるほどの古典にはほとんど他に例の無いことではないか。原撰本に近い時期の古写本と目される鈴鹿本を中心に据えての、ことに国語学の成果を十二分に駆使しての全巻校注という古典大系本は、一挙に万葉学の水準にまで高めようとの校注者の壮志に支えられてまさに画期的な業績として成った。しかし、少くとも一般的には右の一事が象徴しているごとき実情にある。今昔物語集研究の若さを痛感する次第である。

*1 今昔物語集の資料性（山梨県立女子短期大学紀要第一号・昭和四十二年三月）

*2 八・十八・二十一の三巻欠、標題一〇五九話中、本文欠一九話、従って現存は一〇四〇話（うち一六話は首・尾欠の不完全説話）である。右拙稿、

表1参照。

*3 日本古典文学大系本『今昔物語集』五、凡例(四)。

二

古今和歌集・後撰和歌集に対する拾遺和歌集のように、宇治大納言物語に対して宇治拾遺物語が編まれ、今昔物語集の拓いたとき世界は、あるいは口承文芸の世界にあるいは各種説話集や諸記録の中に類似説話を分化・習合させて再生産をくり返しつつ現在に至っているものゝごとくである。しかし、今昔物語集それ自体としては比較的特異な流伝形態を採ったのではないだろうか。たとえば、無窮会の神習文庫に蔵する『続今昔物語』はいかにも今昔物語集に直接する説話集と思われがちではあるが、その実は今昔巻二十九を二分冊した二冊本(林家旧蔵の内閣文庫本Aと同体裁)の、剥落した題簽に加筆するに「続今昔」を以てしたに過ぎない。かゝる加筆が平然と行われ、またこれを『国書総目録』が何の怪しみもなくそのまゝ登載することが示すように、今昔に対して後続説話集なり影響作品なりを予想することは極めて自然ではあるうけれども、事実はまさに右の次第であり、近く芳賀矢一の致証やことに芥川の再発掘をまつまで、今昔が一般読書子の目に触れることはきわめて稀でしか無かつたものと思われるのである。

今昔物語集そのものゝ流布は、江戸も中期、享保年間における井沢長秀の『考訂今昔物語』(叙・凡例による)刊行によってであつた。宇治拾遺は早くから梓行されているのに

此書はいまだ刻むことあたはず。編輯よりこのかた。数百年に及びぬれば、謄写しばかりかとなりて。文字脱落し。趣意わかつた難きもの多し。(叙)

とするこの本は、はたしていかなる古写本に拠つたものであろうか。

一、此書。旧本片仮名をもつて書す。今以呂波字をもつてこれを記す(凡例)

とする用字法のみならず、文体も編次も改めて、まったく別箇の書のごと

く編修されたこの本からは、もはや推し量るべくもない。たゞし、おそらくは鈴鹿本ないしそれ以上の古写本では無かつたであろう。何となれば、鈴鹿本にのみ存する巻十七の四十三語以降からの採択は一話もなく、鈴鹿本以外の諸本では途中で切れている第四十二語も(大系本三、565—16「毗沙門天ニテ在マス」以下八行)、

毘沙門天の像なり。かたはらに牛鬼たをれて死居たり。仏の加護法華の靈驗。きはめてたつとき事也となむ。かたりつたへたるとなり(倭部二十六ノ七)。

と至極簡単に話のつじつまを合せていること、他の末尾欠脱語(巻十一ノ三、巻二十七ノ十四、巻三十ノ六・七)と一般だからである。後述の信友校本十七、巻三十第六語末には「コレヨリ下諸本無」の注下に井沢本の本文を書入れて「或人曰コレヨリ長秀作文」と明記する点、注目せられる。ともあれ、それまで長く孤独をかこつ存在であつたと目される今昔物語集を公刊した功績は高く評価すべきであろうが、所詮それは啓蒙家の仕事であつた。いわゆる研究らしい研究は、さらに時を隔てゝ幕末の考証学者たちを待たなければならなかつたのである。丹鶴叢書本の校刊事業(一八四七—一八五三)や、符合校(一七七五—一八三五)等の研究を承けた岡本保孝(一七九七—一八七八)の『今昔物語出典考』などがそれである。

*4 柳枝軒、茨城多左衛門版行、享保五年五月朔日、肥後隈本、井沢節長秀叙、巻一奥に「享保五庚子年孟春穀旦」、巻十五末の蔵板目録奥に「享保六孟春日」。後編は第一冊扉裏に「享保十七年冬至之日 柳枝軒識」、巻三十末の隆国伝補遺奥に「享保十八年孟春吉日」と見える。倭部三十巻。

*5 この事については従来あまり注意されていないようであるが、『今昔物語標目探考』(文化ごろ写本)が東京国立博物館に、その写しが大東急記念文庫に伝わり(後者には「木村正群図書」の朱印あり)、また『今昔物語出典考』(静嘉堂文庫蔵の自筆稿本による)のはしがきにもこの間の消息が明らかである。(国立国会図書館蔵・況斎全書本の『今昔物語出典考』は静嘉堂本の写しである。この本によつて『国文注釈全書』に翻刻するところや、それをそのまま引く『今昔物語集の研究上』(片寄正義著)には誤脱も見えるゆえ、左に全文を掲げる。)

此今昔物語各条の出典は三拾年前狩谷掖斎存生の比これかれ書付おかれたるをかりてそのまゝにうつしおきたるに、又友人伴氏直方といふものゝ挿架の書におなし筋の物あれば借得てくらへみるに、藍本はひとつものにて掖斎氏増補ありたるものとみえて本朝の部は殊に出処おほくもれたり、全部にわたりては伴氏のかたにのみ出処しるしおけるもあればこれをも書加へおきたるを、このころ友人木村氏正辞又標目探考と題したるをかされたり、ひらきみるに是も両氏の書とはしめひとつものとみえて、つかるしものまたくおなしさまなるもおほし、天竺の部には殊におほく出処をのせられたは今そのまゝに書入おく、△の印を冠して両氏と混せしめしと也、おもふに木村氏のかされたるは釈氏の人の物したるものならむ、天竺のみ詳にして本朝は甚簡略なればしかおもはる、そも〳〵天竺と震旦とはこゝろをつくして尋たらんにはしられざるはすくなかるへし、本朝の事は此書にのみ残りて他書にはそのつたへの絶たるおほかるへくおもふ也、此三書にもれたるをみいつるまに〳〵書くはへおかむとおもふ

安政庚申花朝後一日之夜燈下にするす ましての屋の主人

片寄氏は「出典攷は掖斎書入本・伴信友校本・木村正辞蔵本の三者を彼此照合して編纂されたものであることが分る」（『今昔物語集の研究上』一二二）と述べておられるが、「信友」はもとより誤認であらう。伴直方については、森潤三郎氏の「伴直方伝の研究」（『国学者研究』所収）にやゝ詳しい。

三

さて、一代の碩学伴信友（一七七三—一八四六。同県人として、また、同学を志す末輩の私情としては「伴信友翁」とよびたいのだが）の、百余部に上る著作の中には、今昔物語集を援くことも稀ではない。たとえば、『比古婆衣』十八の巻「八橋」の条に

さて又古今本今昔物語集に此条の物語の趣をのせて、其ヲ八橋ト云ナル様ハ、河ノ水出テ蜘蛛也ケレバ、橋ヲハツ渡ケルニ依テ、八橋トハ云ケル也、とあるによれば此処むかし河水の湧溢れ堤などのきれて水の蜘蛛に流るゝ様になりたりけるをよくも修らひあえずして、やがて其流れに橋をわたしたりけるが八つありしによりて地名どもなれるなる

べし

（『伴信友全集』第四、四百一）と見えるのなどがそうであるが、かならず「今昔物語集」と言い、かつ、「古本」を冠することが注意せられる。同じく『比古婆衣』二十の巻に引く押紙の記事は

今昔物語冊一卷に、今昔元明天皇ノ失給ヘリケル時……

（同、四百四十八）

と「集」を欠く。この押紙の墨書は「信近ノ書入ナラン」との全集編者の注記であるが、「今昔物語」とだけいう書きぶりからでもそれはうなづける。現在なお一般に、たとえば教科書などの引用や解説にも「今昔物語」とのみ言つてすます向きの見られるに比して、信友のこの厳密さは貴重すべきであらう。

神代文字否定論で著聞する『仮字本末』には、表記史上不滅の立言が多いのであるが、片仮名の条における次の記事はこの際もつとも注目に値する。

おのれさきに今昔物語集の古写本を見たるに、古さまの紙の大なる雙紙に、物がたりを、大きやかに片仮字もて書記したるが、祝詞宣命など書く例のごとく、漢字を大に書いて、片仮字を其下に小さく分ケ書ケリ。こは決く隆國卿の記されたる本のまゝに写せるものにして、これ昔の片仮字書のおほかたの例なりけむ

（版本下巻十七ウ、全集第三、四十五十八）

片仮名小書のいわゆる片仮名宣命体については、筆者もかつて「捨てがな」という側面から表記史上の位置づけを試みたことがあつて、まことに興味深い。しかしそれ以上にこゝで心ひかれるのは、信友が見たという今昔物語集である。「古さまの紙の大なる雙紙」の古写本とは一体いかなる本だったのであらうか。

* 6 東洋文庫蔵の自筆稿本も同文（ただし、十六ウ）。「決」はウヅナシ（版本上巻之下、八ウや『正卜考』一ノ二ウ等に傍訓あり）。

* 7 表記史上の一問題——捨てがなの場合——（日本大学国文学会『語文』第三十一輯・昭和四十三年十二月）

信友の見た古写本がいわゆる鈴鹿本であったことを見出でた時の驚きと感激を筆者は今でも実感をもって想起する。それは、昭和四十四年の十月二十三日のことであった。同郷の山田清市氏から、かねて小浜に今昔の写本ある由を聞き及び訪書の機会を待っていたのであったから、閲覧の内諾を得て勇躍して出かけた。今でこそ、大鹿久義氏の労作『酒井家伴信友文庫目録』（小浜市立図書館）や『小浜市立図書館伴信友文庫目録』（『皇学館論叢』第三卷第五六号）により居ながらにしてその概要を知ることが出来るが、当時は目録もなく一般にはまったく知られていなかった。もちろん筆者もこの時まで、それが信友の旧蔵書であることにさえ思いも及ばなかった。市役所から市立図書館に移動したまゝとかまだ紐のかゝっている包みが目の前に置かれた時の期待感、荷造りを開き、一見して流布本系と認めた時の淡い失望感、しかし、丹念に施された校合の朱筆、ことに三冊め巻十二冒頭の

当巻以古本校合 但欠目録 其古本之事ハ巻尾ニ記セリ

の朱注記に導かれて最終巻末を検した時の緊張感——そこには紛れもなく、目慣れた鈴鹿本の見事な模写数葉とその批校来由を語る信友自筆の文字が儼存したのであった。

「十二巻奈良本批校之問事」と題するこの文章は、一面十四行、二丁にわたって、信友一流の謹直な楷書体で書かれ、果てに、

天保四^{癸巳}年正月九日夜ヨリ起メテ十一日昼スクール批校事畢ヘヌ

信友

と記される。続いて、天保十五年三月の追記約一丁を付するが、この事は後に述べる。天保四年といえは信友六十一歳（教え、以下同じ）のことである。四十九歳で家政を嗣子信近に託して藩務勤番を致仕、待望の学問専念の道に入って十年余、もつとも学究活動の旺盛であった時期に違いない。今昔物語集十八冊を書写せしめたのは、これより二年さき、天保二年五月のことであった。この信友本についても後にやゝ詳しく述べる。

さて、信友の言うところを聞こう。実はこの天保四年の文章についてはすでに長野嘗一氏が「今昔物語集『奈良本』について」と題して紹介せられ有益な論評を加えられたところであった。^{＊8}しかし、氏の拠られたのは東京大学図書館に蔵する南葵文庫旧蔵の写本であって、信友の知友長沢伴雄（一八〇八—一八五九）が天保七年六月に書写せしめた本である。伴雄は紀州藩の国学者であって、信友の没後刊行の代表的著作『仮字本末』序文の筆者でもある。信友はこの後、天保十五年三月に再び鈴鹿本に出会えて、巻二十七と巻二十九の批校をしているのであるから、この長沢伴雄本はまさにその中間の時点における信友本の書写ということになる。転写本でなく直接原本に行き当たった感慨もまた格別であり、かたゞ、長沢本には反映していない加筆訂正も見えるので、復をいわず全文を次に掲げてみる。（原文には無い空格を適宜置き、○印ごとに改行して読み易さをはかる。下段に私注を加えながら進むことにしたい。）

* 8 『国語と国文学』第三十九卷第十号（昭和三十七年十月特輯号）

十二巻奈良本批校之問事

奈良人某ノ蔵テル古本ノ今昔物

語集第十二巻一冊ヲ見ル 或人

ノ計ラヒテタゞ二日ヲ限リテ借

ル事ヲ得テ校合セリ¹ サテ其奈

良本 目録ヨリ尾マデ六十二帋

本ノ幅八寸五分整一尺 墨附片

面十一行 片仮名ヲ以テ書リ

通校スルニ 今ノ写本ハモト此

奈良本ヲ写タルモノニテ其²ヲ次

々ニ転写セルモノトミユ 其証

1 倉卒の間における非公式の借覧であって、仲介者はもちろん、ことに所蔵者については公言を憚るべき事情があったことが知られる。

2 信友校本はいわゆる流布本系。

3 「モノニテ其」見せ消ち。

4 鈴鹿本を現存諸本の祖本とする今昔の伝本事情は、馬淵和夫氏が初めて推断されたかに言われ（『今昔物語集における欠文の研究』／＼『国語国文』第七卷八号／＼『今昔物語集伝本考』／＼『国語国文』第二十卷四号／＼『小学館版』『古典文学全集21』解説等）、筆者などとも多少の証明を試みたことがあるが（今

タル事ナシ 10

昔物語集の資料性」・「今昔物語集古本系統の再検討」△「山梨県立女子短期大学紀要」第一・第三号▽、はるか百年以上も前に伴信友はかくも明快に論断しているのである。

5 イミシクはイミシウ 19611(数字は
 古典大系本の頁・行、以下同じ)が正
 しい。対校底本が流布本であったため

の誤りと思われる——大系本第4刷までの校異五七八参照——忽々の間の批校によるケアレス・ミスであらう。なお、かな大字は他に カク（161・16・164・8・

レ(18917)がある。ト也については
後注。

6 『仮字本末』に「今昔物語集をは

たるはいと少く云々」(下巻、版本二十オ、全集第三、四百六十ペ)と言うのは、この研究を踏まえての上であること著しい。

7 必極卿ノ手ニ、傍書補入。

8 吾人はやの仮名そのものと見たのであるが信友は也と見た。たゞし、ほとんど仮名に近いとする認識がこの句

と思われる。信友校本卷十二第一語末のヤの校異に「ヤ以下字体皆此如」と注

本一、補注二参照。——もしくは印

とからする単なる先入主によるものかも知れない。少くとも今昔写本不得のトヤに注目したことは確かである。いずれにせよこの補入追記は、一步真に近づこうとする姿勢の顕現と目される。

「は、傍書補入。」

10 後述(七)参照。なお「片仮字異
体証文切字例」のムの項には「さて今
昔物語集の古写本の中、おのれが見た
る巻々には、一つもン字を書る事なく
なべてム字を書り」と注する(『仮字
本末』下巻、版本廿五才、全集第三、
四百六十四頁)。

11 筆者もかつてこの点を、古本性を検証する視点の一つとして扱った——今昔物語集の資料性——。

12 宇治殿云々には問題もあろうが、いわゆる意識の欠文説や転写の失については、まことに的確直截な指摘といわなければならない。意識の欠文については、たとえば信友校本卷二十九第廿一語「弓□シテ」の注などが、その具体的な考究の徴証であろう（七）参照。

13 大系本校異
参照。

14 いわゆる無意識的欠文の鈴鹿本經山に関する簡明直截な指摘である。

15 ウヅナシという強い論断であるが
この点については必ずしも諾えぬ。流

例ノゴトシ¹³

○奈良本折口ノ方イタク蠹損シ
テ字ヲ失ヘル処多シ 写本ニ字
ヲ欠タル処悉其蠹損ノ処ナリ
コレ今ノ写本スナハチ此奈良本
ヲ以テ写セル証トスベシ¹⁴ 然ル
ニ其蠹損ノ字今写本ナルトハ甚
多ク殆十倍¹⁵云フバカリナル
トコロアリ 其ハ今ノ本ニ写シ
タル後数年ヲ経テ今日マデニ
蠹損ヲ重ネタルモノナル事決シ¹⁵
サテ亦写本中蠹損ニテ字ヲ欠タ
ル処ヲ奈良本ノ蠹食中ニ就テ求
ルニ紙ノ縫^キレ縮^チミ或ハ堅マリテ
アルヲ小篋ヲモテ懇切ニ開キ意
ヲ尽シテ細ニ視ルニヲリノ字
ノ偏旁欠画ナドニヨリテ髣髴ニ
読得ラル、ガアルヲ今新ニ写本
ニ書入タリ¹⁶ タバ打見ノミニテ
ハ更ニ見ユベキニアラサレバソ
ノカミ写手ノ蠹損トシテ欠テ写
サマリツルハ疎ナルニハアラズ
カシ¹⁷ 今然モノセルホドニ其蠹

布本系諸本は欠文を極めて機械的に同
じ程度の空格とする場合が多いからで
ある。また、写された後に鈴鹿本の方
の蠹損が進んだとすれば、写本には
鈴鹿本に見えぬ文字が残らねばならぬ
が、さような事実もない。筆者は鈴鹿
本から古本系写本、さらには流布本系
写本の生まれた時点と信友が批校した
時点との間には極端な蠹食の進行は無
いものと考えている。つまり、夥しい
蠹損は鈴鹿本がいわば放置されていた
長い期間の所産であり、写本はある種
の管理体制に入ってからであつて、そ
れは信友時代からはさほど遠くない、
少くとも近世以前では無いものゝよう
に思われるのである。

16 この部分を読むたびに筆者は、山
田忠雄先生のお伴をして鈴鹿邸にて古
典大系本の本文校定に従った幾冬かを
想い起こす。そして、ピンセットで抓
み上げるようにした小紙片を小篋の先
で丁寧に伸ばし、矯めつ眇めつ判
読に苦心して居られた山田先生の映像
を通して伴信友の真摯な姿をイメージ
する。古典大系本の発刊が毎卷三、四
月の例だったのでそれは決まってい、
二月、寒中のことであつた。もちろん
まだ鈴鹿三七氏ご健在のころで、上田
秋成の幅などの掛かった二階の大きな
部屋で、ご両所の学問上のお話など傍
で謹聴したのが懐しい。

17 現存諸本から推定するに、その祖

損ノ僅ニ残レルガ塵トナリテ失
タルモアルバカリナレバ本書ト
イヘトモ今ヨリ後再其真ヲ見ル
事ヲ得ベカラズ ヒトリ此校本
ニノミ真ハトマレリト云フベ
シ¹⁸

○写本誤字多クマタ脱字落文ア
ルヲ逐一ニ校正セリ 但シ其誤
脱ハ始テ写セル時ノ誤モアリゲ
ナリ モトヨリ転写ノ誤トミユ
ルハイト多カリ 亦写本ニ後人

ノ推量ニテ字ヲ改マタ書加ヘタ
リトミユル処マレノ見エタリ
其ハ批校ヲ見テ知ルベシ¹⁹
○奈良本字体ノ古雅ナルモヲリ
ノアレド勿々ノ間写出スニ堪
ヘズ マレノオモフ処アリテ
写本ノ字傍ニ書ソヘタルハアリ²⁰

○奈良本ノ書体ヲ見ルベキタメ
ニイサ、カ影写シテ下ニ附ス²¹
サテ奈良本奥書モアラザレバ何
ノ世ニ書タルニカ知ル由ナシ
予既ニ見タリケル他ノ古写本共

本の書写態度はかなり大様で、ことに
蠹損個所は途中一、二字見える場合も
一括して空格としたものと思われる。
その限りではやはり疎というべきであ
ろう。

18 まったく同じ感慨を山田先生も漏
らされたし鈴鹿氏も相槌を打って居ら
れた。信友校本と較べてみると、さす
がに時間をかけて兩三度に及んだだけ
あつて、大系本がはるかに厳密に多く
を読みとっている。

19 信友は鈴鹿本より直接、流布本系
祖本に書写されたと見ているようであ
る。流布本系が古本系を経由したと目
されることについては論証した通りで
ある——今昔物語集の資料性！

20 様に対する様、殺に対する殺、
缺に対する缺、急に対する急、曙に
対する曙、懷妊に対する懷妊などに
注意している。これら用字の古本と流
布本との差については古典大系本が
なり組織的に扱っている——大系本四、
解説二九・三〇べー。

21 この影写については後に触れる。

22 筆写の時期を南北朝ないし室町初
期まで下降させる見解もあるようであ
るが、天保より六、七百年前といえ
ば、現在一般に考えられている鎌倉中期よ
りもさらに以前の、今昔成立時期に

ニ准ヘオモフニ六七百年前ノ書
ナラムカ イトメツランキ古写

本ニゾアリケル²² 此本全ク備リ

テ在ルニカ欠ナガラモノホ在^ル

ニカイマダヨクモ聞定メカネツ

時アリテマタ／＼得テミムヨシ

モガナ²³

より近い時点を信友は想定していたらしく思われる。

23 信友のこの念願は、現存鈴鹿本中の一部については「追記」にいうごとくやがて叶えられた。しかし鈴鹿本九卷以外の巻々への「ミムヨシモガナ」の希いは、百四十年前の信友そのまゝに現在も続いているわけである。

以上、筆者の贅注がかえって信友原文の真意を損うことをおそれるが、校合来由に始まつて、書誌・伝本・表記法・仮名字体・仮名用法・欠文・見せ消ち・蠹損・校合態度等々、本文ないし書写に関する主要な問題点はほとんど漏れなく提出され、しかも的確な判断の上に立つ簡潔明快な行文は間断するところが無い。わずかに二日の借り出しでの研究であつてみれば、透徹した眼力とそれを支える背後の学殖にたゞ驚嘆するばかりである。

なお、「写タルモノニテ其ヲ」の見せ消ちや、「必極卿ノ手ニ」および「了」の補入等は長沢伴雄本には反映していない。されば長沢本の書写された天保七年三月以降の書入れであろう。おそらくは天保十五年の追記の際の手入れと思われる。生涯を学究に徹し、「穿鑿の至らずして後生を誤らんことを懼れた」敬虔・慎重な学問的態度をかいま見る思いがする。

長野氏が論評されたように、巻十二の本文対校そのものは決して厳密とは言えないけれども、巻末に「奈良本影写」として掲げる臨摸数面は、いかにも実証学者信友の面目躍如たるものがある。現在ならばもちろん写真に相当するわけであるが、原本の鈴鹿本のそれよりも一回り大きめに拡大された態の伸びやかな臨写で（每行末、数字分折り曲げる）、「目録之首尾」として「今昔物語集巻第十二／本朝付仏法／音越後国神融聖人縛雷起塔語第一／尾金峰山 薊嶽良筭持経者語第四十」の二条、「本文之首」として、第一話の標題と第四行途中までと末尾二行（「毎章結語也字体悉如此」と注記）、および第二話の標題と第二行途中まで、次いで「本文尾」として第四十話

の標題と二行、さらに「第卅三語増賀之歌」と注して二行と四字、蠹損の微細な状態まで精写して余すところが無い。末尾に「信友自写」と署名する（以上、二丁四面）。

*9 『仮字本末』序の著名な遺戒を想起する——「翁つねにいはいれらく 凡書の考説するさんはいと／＼かたきわざなり さるは年わかきほとにいとよう解得たりきとおもへりし説の後に悪く思ひなりぬる 又かたかりしことのやう／＼考出られたるなど きふけふとかはりゆくよ から人もこれを木葉のちるにたとへていへるか如くにて 塵はかりの誤なからしめむは生涯つとむともいと／＼かたかるへし されは其を板にありなとせんには後の悔や千たひすともとりかへすへきものならずと教されたり」

*10 この自署も長沢伴雄本には見えない。

五

こうした天保四年正月の今昔巻十二研究より十一年、信友七十二歳の天保十五年の春三月、ふたゝび鈴鹿本（この度は文字通り鈴鹿本）にあい会うことゝなつた。天保十三年二月廿五日、七十の賀のことが家集長歌の詞書に見え、翌十四年正月四日、京に移り住み、二月二十五日誕生祝のことが色葉字類抄附言に見える。「命なりけり」の感慨というべきであろう。「去月廿日之貴簡去廿八日到来」に始まる江戸の黒川春村への書状には「ふしきなる値遇に候」と早速この事を知らせている。

影写はさきの二丁に続けて片面、「鈴鹿所蔵／巻廿七巻首但目録欠」として第一話の標題と本文第一行、「下略」、次いで「目録」として「今昔物語集巻第廿九／本朝付悪行」、「下略」、続いて「首」として第一話の標題と本文第一行を掲げて「下略」、最後に「又自写」と署する。蠹損まで精細に摸することも巻十二に同じい。この度の批校に関する「追記」は次の通りである。

追記

天保十五年三月京ニアリテ鈴鹿筑前守連胤ノ近頃奈良ヨリ購得タリト
テ秘蔵ル此物語集ノ古写本ノ闕巻ヲ乞得テ見ルニ本朝部第十二第廿七

第廿九ノ卷三冊アリ 其第十二卷ハ上件ニ記セル如ク既ニ己ガ本ニ校セル古本コレナリ 故今其卷ヲハ除テ今第廿七第廿九ノ二卷ヲ前度ノ例ニ校合セルナリ 其二卷ノ書ザマ冊子ノホドモカノ第十二卷トモハラ相同シ サテソノ第二十七卷ノ第四十語ノ初張ノ左ノ末ノ行ニ和主ニ副テ守^{ラム}云フ時ニ此男由^ノトマデ書タル紙端ノ縫下ニ虫損ノ間ニ字見ユルヲヤヲラ推排キテ意ヲツクシテカツ^ノ読ミ見ルニ如此サマニ小字ニ書タリ

一見畢南井坊内総六丸此比春日太神開門尤以目出^{タシ新造屋ノサン}八月十一日

ロウ

新造屋トハ東大寺中ノ所也 八月十一日春日太神開門ト云フ事ノアリケル時新造屋ニ参籠シテアリケルホド件ノ文マデ書写セル由ノ筆スサヒト見エタリ 年号ノナキハロヲシ、サテ又鈴鹿氏此外ニ天竺震旦ノ部若干卷藏リト聞タレドモトヨリ其本書ヲダニ省キテ写シ持タザレバ借リテモ見ズ ソモ^ノ去シ天保四年ニ此古本ノ第十二卷ヲ見テ欠ナガラモナホ世ニ有ラバト見マホシカリツルニ 十年ヲ経テ後今ユクリナク京ニ来テ件ノ二卷ヲ見ル^ノ得タルゾメツラシキ

己ガ此本既ニ異本三四部及印本ヲモテ対校セル上ニ今古本ヲモテ校セルニ頼墨ヲ用フ 前校ト同キハ更ニ同異ヲ云ハズ サレド其事ノ趣ニヨリテハ前ノ校字ニ古ト書添タル処モアリ サテ又古本ニモマレ^ノ誤字ト見ユルガアリ 然ル中ニ決テ誤字ト著ルキハ捨テトラズ 此事ハ前ノ度ニ云フベカリツルヲワスレテケレバコ、ニ云フ

信友又記

この度の対校が天保十五年三月十九日に平安堀川の官宅において行われたことが卷二十七の巻末付箋¹²によって知られる。堀川の官宅とは藩守酒井侯の京都所司代邸内のことである。(二年後の十月十四日、信友は同所で七十四歳の生涯を終えた。)

さて、この追記の記事からは次の諸点を明らかに知ることができよう。

第一に、鈴鹿本は信友が見た天保十五年三月ころに奈良から鈴鹿家に購入されたこと。天保四年の際のは「奈良人某ノ藏テル古本」であった。鈴

鹿三七氏が曾祖父連胤翁の五十年祭記念に刊行された『異本今昔物語抄』(大正九年十一月)には

この九巻の残欠本はもと奈良附近の古寺に在ったものと想像せられるが確かな記録が残ってゐない。それが転じて我が家の有に帰したのは天保の末頃であらう。

と述べておられるが、信友が見た天保十五年はまさに天保も最末年にあたる。「近頃奈良ヨリ購得タリトテ」という行文は、簡潔な中にももつとも昵近であった知己への通報が入手後間もなくであったことを物語るものと思う。

第二に、この時信友の見たのが卷二十七・卷二十九の二冊であり、さきの卷十二と合せて本朝部は三冊であるが、いずれも現存本中のものであり、それ以上では無かったことが知られる。それにしても同じ本朝部現存本の卷十七を見ていないことが不審である。前引の黒川春村宛書状によれば、この時の披見は六冊、「内三冊は天竺部にてくちをしく候」とある。鈴鹿氏があとを見せなかったとも考えにくい。あるいは鈴鹿本の現九冊はこの時一回での蒐集では無かったのかも知れぬ。そういえば十一年前に信友が見たのは卷十二一冊のみであった。奈良本はかくのごとく、何等かの事情でばら^ノに持ち出され少部ずつ売却されたのではないか。たま^ノ鈴鹿家に入った分が同家代々の珍藏によって現在に至っているということかと思われる。もちろん、他は鈴鹿家入庫以前にはろびてしまっていたとも推せられようが、今なおどこかで、ひそやかに眠りつづけているかも知れないのである。なお、先年の卷十二披見は江戸でのことであったことが同書状で分かる¹⁴。

第三にもつとも注目すべきことは、信友の子細な調査によって卷二十七に存する紙端の書入れが発見されたこと、信友はこの書入れから、東大寺の所新造屋においての書写であることを推論したことであらう。春村宛前引書状にも

蠶食間に新造屋にてうつし候由之詞かりそめに草にてさい書し候を見付候

とこれを報告している。その他、信友の校合態度なども この度の追記か

ら窺い知ることができるが、とりわけこの第三の点に関してはその後も誰も注意していないのであるから、考証学者信友の鋭い観察力を高く評価しなければなるまい。普通に本文を読んでいるかぎりには到底見えるはずの無い、ノドの奥、半ば綴じ込みの中にひそんでいる文字なのであるから。

この信友の発見に導かれて現存鈴鹿本を調べてみると、巻二十七にはこのほかに一ヶ所、他に巻十・十二・十七に各一ヶ所、都合五ヶ所において紙端の書入れが確認された。すなわち次の通りである。

A、一見畢 総六丸 十九

巻十第28紙左端〔第十七語末—大系本二、302—6〕

B、一見了 総六 十九

巻十二第42紙左端〔第卅二語中—大系本三、119—14往生〕極楽ヲ

C、一見畢 総六丸

巻十七第43紙左端〔第卅六語中—大系本三、357—7肉眼ニハ〕油ノ色ヲ

D、此一条ハ尤以コワキ事也 可有覚悟

巻二十七第22紙右端裏〔第廿一語中—大系本四、506—11妻蜜ニ〕箱ヲ取下シテ

開テ見ツレハ人ノ目ヲ接テ数入レタリ

亦男ノ聞ヲ毛少シ付ケツ、多ク切入

レタリ

巻二十七第41紙左端〔第四十語中—大系本四、333—17此ノ男由シ〕无シト

E、一見畢南井坊内総六丸：

いずれも本文との墨色の差までは現状では分かりかねるが、全体にやゝ稚拙という感じで、とても本文と同筆とは認めがたい。また、ABCと信友の見たEとは一紙の左端ぎり／＼の綴じこみの中にあるに對し、Dは少しく異なる。これは一紙の右端、しかも裏側にある。その上、他の四例と違つて文字通り「筆すさび」に類する書付けのようである。今昔物語集巻二十七は「本朝付靈鬼」ものゝ氣や鬼、生靈・死靈、さらには狐・野猪などに関する怪異譚であるが、わけてもいわゆる戻橋説話に類する安義橋・勢田橋の怪女に関するこの辺には背筋の寒くなるような場面が多い。いわば事務的な心覚えに過ぎない「一見畢（了）」とは違つてこれは、十九歳の

総六丸にとつては思はず書きつけざるを得ないほどの衝動を起こさせたところの、だからこそ他に異なり裏側に書記したメモかと思われる（さすがに信友も、この裏書きにまでは気づかなかつたものと見える）。これは総六丸の署名がないから別人—あるいは本文書写者—という推定も成り立たなくはないが筆跡からは総六丸と見るのが自然であろう。それにしてもこれは、今昔物語集の読者としての、おそらく最初の評言として注目に値する。

これら五ヶ所の書付けはすべて料紙の最左（右）端、Dはしかも裏面、袋綴の一冊の書物として装訂される際には当然人目につかなくなることを用意した上で書かれたものであることは想像に難くない。もちろん、装本される以前の、一枚の紙としての状態の時の所業であろう。

しかればこれは、信友のいうように「件ノ文マデ書写」した由のメモであらうか。一体、書写の際に「一見畢」と書くものかどうか。卑見では、書写されたものを原本と校合する仕事を総六丸が言いつかつたものと推せられる。鈴鹿本に「ごく稀ではあるけれども傍書補入や見せ消ちの存することは大系本校異の示す通りである。「一見畢」は「今日はこゝまで照会した」八月十一日、新造屋の参籠の日の今日は巻二十七の第四十一紙まで点検した」といった風のメモなのではないか。だからこそこの類は一紙の最左端にあるのであらう。果して然りとしてもしかし、まだ一冊の書物として綴じられていない一枚一枚の状態での時のことであるから、この鈴鹿本が東大寺（の庁所新造屋）あるいはそのゆかりの場所といった風に多少拡げた方が良くのかも知れぬが、持ち運びのことを考慮すればさして遠くとは考えられぬ—において書写されたということには相違ないわけである。この意味で、信友のこのメモの発見は、動かしがたい重みを持つものと思われる。

*11 筆者蔵。この今昔物語集のほか、万葉集、神名帳考証、平家・盛衰記、色葉字類抄、類聚名義抄等に触れたかなり長文の学書書状。

*12 此第二十七巻以鈴鹿 所蔵古零本対校
天保十五年三月十九日 於平安堀川官宅

*13 『異本今昔物語抄』附載の「鈴鹿連胤略伝」には「曾祖父の交遊は甚だ多かつた。上述の人々（筆者注—小林民部・吉田松蔭・高杉東行・頼山陽・香

川景樹・伴信友等の名が見える。また、江戸の狩谷樵斎・平田篤胤・屋代弘賢・黒川春村等も後述されている。の外に桂門の諸歌人とは絶えず往来して歌会を催したことはいふ迄もなく当時京師に在った志士学者歌人等は大抵その知己であった。就中穂井田忠友・伴信友・六人部是香の三翁等は最も昵近であつて忠友翁の如きは奈良で古書取調の際など絶えず奇書珍籍の発見を通じて或は書籍器物の影写模造を囑らしたものであつた（傍点筆者）と見える。

* 14 本朝部三冊之内巻冊は先年江戸にて感得之本也

* 15 鈴鹿本が現存今昔物語集の祖本と認められるとすれば、これが東大寺で書写されたものであつたということは、少くとも、現存今昔の成立論や撰者論にある種の制約を加えずにはおかぬであらう。

たと惜しまれるのは、天竺震旦部に対する態度である。「モトヨリ其本書ヲダニ省キテ写シ持タザレバ」という行文や「くちをしく候」という口吻にはいさゝか後悔の気味も感じられなくはないが、この時より十三年以前の信友校本は天竺・震旦部を当初から書写せしめておらず、目録一冊と巻十一以降の本朝部十七冊（十一・十二・十三・十四・十五・十六・十七・十九・二十・廿二と廿三・廿四・廿六・廿七・廿八・廿九・三十・三十一）の十八冊仕立てなのである。信友自筆の奥書には「読むに足らざる故」とする。

今昔物語集 欠十八冊 以或人秘蔵之校本 課人令／書写 他日以二本及印本校之 天竺部震旦部共／不足説故措不写矣

天保二年五月

伴信友

「不足説」と一蹴してしまつた信友の短見は、現存本中過半を占める鈴鹿本の「天竺震旦ノ部若干巻」は「借リテモ見ズ」と追記にしたゝめたごとく、ついに無縁に終つた。信友の関心事は もっぱら印本（井沢長秀の享保刊本）との校合にあつたものと目される。あるいは書写のための時間的ないはは経済的な制約も考えられなくはない。しかし、結果として信友は今昔物語集にとつて真の知己ではなかつたのである。井沢長秀にはそれでも本朝部三十巻に続いて天竺部十五巻・震旦部十五巻の印行が当初からの計画としてはあつた。（『考訂今昔物語』凡例等）天竺・震旦部を前提としてこそ本朝部がある。主幹の仏教説話を抜きにして何の今昔ぞと言うべきで

あらう。現在もなお滔々として天竺震旦蔑視が行われ、本朝部のみの出版があいぐことを思う時、信友の「不足説」が直接の濫觴ではないにしても、当時からすでにかゝる風潮のあつたことは注意して良い。国会図書館に蔵する天明三年識語本（静嘉堂文庫蔵本の転写本であらう。静嘉堂本は完本）等、本朝部のみを伝本が幾つか存するもののためと目される。それにつけても、戦後唯一の完本である古典大系本の英断を称えなければならぬ。

六

信友本今昔物語集は、縦二七・三センチ、横一九・五センチの美濃版装綴、薄茶横縞模様表紙で十八冊、各冊初丁右下隅に「古川所蔵」^{*16}の蔵印、第一冊初丁には下部ほど中央に署名な

身後俟代我珍藏人伴信友記

の印記を持つ蔵印がある。三冊めまで片面十一行、以下は各冊十二行、一行の字数は十三・廿二・廿八・三十・三十一の諸巻は二十字、十七・十九・廿四・廿六の諸巻は四十文字内外、他はこれらの中間にあつて一様ではない。印本および異本三、四本を以て校合され（奥書には二本とあるが、その後追加された模様、追記には三四本とある）、印本の注もすべて忠実に上欄に書き出してある。異本のうち三本は大概同種類の本（おそらくは流布本系）と思われる。それは「イイ」と三個並記する校異の目だつことによつても知られる。また、おそらくは後日の校合の方であらうが対校本の一本に「塙本」^{*17}の用いられたことが、諸所の注記、たとえば巻二十八第三十六語末「諸本欠タリ 塙本十七行欠ナリ」などによつて知られる。

* 16 小浜西津の廻船問屋古河教典の蔵印（先代教寛は信友と親交があつた）。

* 17 時に「上」のみで略記。東洋文庫に蔵する山川真清校本において、対校本の一つ、水野土佐守本に「原塙本」と注するところよりすれば、新宮城田蔵の現東北大学狩野文庫本こそ信友も校合に使用した本ということにならう。（東北大本に間々見える校注者名「真清」は山川真清であることが東洋文庫本で知られる。）

その第一冊は左肩に「今昔物語集 目錄一合十八本」の題簽を有する六二丁の目錄である。卷第一の始まる初丁には「惣目上」、本朝部の始まる卷第十一には「惣目下」と記し、各条に、印本にあるものはその所在を「廿八四」(卷二十八の第四話を示す)のごとく朱注する。星加宗一氏が日本古典全集本の解題で井沢長秀本との対照表を掲げられたが、信友本のこの目錄でもすでに試みられているところであった。また、各条下に出典を朱書する。たゞし、卷によるばらつきが大きく、天竺・震旦部について言えば、卷二・四・五・七が詳しく、卷一・三・九にはまったく見えないといった風である。あるいは所掲の本のゆえであろうか、または筆写漏れであろうか、いぶかしい。その書き様を卷五冒頭で示せば次の通りである。

僧加羅五百商人共至羅刹国語第一

^{*18} 西或記十一卷三丁 宇治拾遺六卷

国王狩鹿入山娘被取師子語第二

同十一卷三丁 珠林十一卷三丁 執師子国ノ丁也

国王入山狩荒見鹿母夫人為石語第五

雜宝藏經一卷十九丁 少異也 報恩經三卷九丁

^{*18} 「西或記」(「或」は「域」の省体)を信友本は「西或化」(「或」は「或」)、これをさらに写した長沢伴雄本は「西或化」とする。また、次条「執師子国ノ丁也」を信友本は「丁」を「丁」のごとく作り長沢本は「ノ」を脱する。長沢本は「珠林十一卷三丁」の「三丁」をも脱する。

僅々二条の注記によってとあるが、両本の書写態度の一斑をうかがうに十分であろう。つまり、信友本もさして厳密な書写とは言えないが、長沢本では一層これが崩れているのである。

岡本保孝の出典考に比べると、いち／＼丁寧に丁数を、しかも「丁」^{*19}をつけて示すことゝ、「執師子国ノ丁也」とか「少異也」とかの注記のある点とが異なる。保考が木村正辞本によって加えたという△印部分(巻五についていえば、第二十四語の法苑珠林二ヶ所に、同じく珠林の類語を添え、第二十八語に雜譬喻經を加える)は見えないようであるが、この信友本には、第二十四語には「今昔ニハ二所一所ニ書也」と傍注し、かつ、「亀鴈旧雜譬喻經」五分律ニハ亀雁仏本行經」とする注記があり、第三十二語には「葉尤国縁之云釈迦先生也此有老母雜宝藏經伯老父也」と長注するなどの、出

典考には見えぬ注記が存する。もとより信友の手ではないから基く本に元来あったものであろう。しかし、他は大概出典考と一致するところからすれば、信友が書写せしめた際の依拠本と保考の拠ったという椽齋本とは予想以上に近い関係にあるものとごときである。あるいは同一本であって出典考では一般に長注を採らなかつたものか、少くとも親子関係に近い本であらうと思われる。

^{*19} 東博本『標目探考』ではすべて「葉」に作る。

^{*20} 東博本『標目探考』には「今昔ニ処ヲ一処書写也」とする。

^{*21} 東博本『標目探考』には「葉老国因縁也 釈迦先生ヲ云今昔ニハ作老母ニ雜宝藏經ハ作老父」とある。信友本がこれらを承ける末流の本であることは明らかであらう。

卷二では原拠を挙げることが目立つ。浄飯泥洹經記(一)・仏界初利經(二)・有經經(十一)・灯指經(十二)・阿育王經(十四)など。

卷七では、第十語の「法華伝九卷四丁」に「惠観作 法華伝記 全部十冊 古本ノ丁付」と注し、第十九語の「同八卷十四丁」には「新板」と注するなど、参看した本への細かい配慮に注意せられる。

卷十一では次の諸点特徴的である。

(A) 出典考に見えぬもの——靈異記中ノ七(二)・古事五(十三・十八・二十六・三十一)および(B) 出典考よりも詳しいもの——積書二卷十七・神寂伝(五)・積書十六卷丁論議・不載(五)・積書三卷十八丁在道昌伝中(三十四)を有すること。(C) 注記的注記の見えること——有崇福寺 滋賀寺ノ丁也(二十九)・貞慶伝後鳥羽帝 射鹿一建寺天智帝一可考(三十)・龍門寺龍福寺龍蓋寺皆淵之構造也積書ニハ龍門寺ノ義淵ナリ(三十八)。(D) 参照記事の見えること——十二ノ廿一条見ベシ(十三)・十二ノ廿条見ベシ(十七)。以上のうち(B)(C)は東博本『標目探考』にはと同趣の記事が見える。

こうした傾向は以下の各巻においても大略同じである。大概出典考と一致しながらも、時には出典考で△印を付するものゝすでにこの本に見えるものもあり(たとえば巻十五のそれは扶桑往生伝と日本往生極樂記が主であるが、すべてこの本も掲げる)、さらには出典考にも標目探考にも見えない「大和

物語」をこの本が積極的に掲げる（巻十九ノ一、巻二十四ノ六・三十六・五十四、巻三十ノ一・三・五・八・十・十二）など、信友本の佳処は一、二にとどまらない。

ところで、以上のごとき第一冊の「惣目」のほかに各巻々首の目録や本文標題下等には信友の手で間々出典を記す。たとえば巻十一には、第十語に「著聞二・釈書一」、第十二語に「著聞二」、第二十三語に「靈異記上・日本紀」、第二十八語に「著聞二」の書入れがある。これらのうち、第十・十二語の「著聞二」と第二十三語の「日本紀」は出典考や標目探考には見えない。この類の巻十二における状況は次の通りである。

第八語 釈書九 恵達伝（「釈書九」は出典考等により）

第十語 続古事談四 釈書十（本文後段「大菩薩示給ハク」の上欄に）

第廿二語 榮華物語（冒頭部「百体ノ絵仏ノ丈六ノ像ヲ」の上欄に）

第廿四語 古事談五 万寿二年五月頃云々（本文二段「関寺ニ詣ツ、一ノ黒キ牛有リ」の上欄に。「古事談五」は出典考等により）

第卅二・卅三語 三国伝記（目録に）

すべてメモ程度の書入れに過ぎず本格的な研究とはもちろん言えないが、博学な信友の一面を推することができよう。巻二十七第七語の「伊勢物語」や巻三十一第三十三語の「竹取物語」を指摘するのは当然かも知れぬが、（両者とも出典考等不載）^{*22} 次の注記などは信友独得といつてよいのではないだろうか。

巻十七第一語 宇治拾遺一ノ巻ニ似タル語アリ（巻二十第十六語「宇治六ノ初ニ似タル語アリ」も同趣）

巻二十第十六語 実録也

第卅九語 浄蔵カ古事ニ似タリ

巻卅一第廿二語 信云 寛仁四年ノ万農池後碑文此語ト大ニ異ナリ併セ見ルヘシ

第卅五語 定恵和銅七年寂 元明帝養老五年崩不合 陵地ノ名モ誤トキコユ 鬼形墓様トイヘル符ヘリ

*22 巻二十四第三十五・三十六の業平説活には「鳩」という用字について「信云 雉ハキジ也 ヲハ伊勢ニしきのおほきさしたるトアルヲ此ヨレル本ニ憶測シテきしト書ル本ニヨリテ誤レルナリ」と述べた後、「スヘテコ、ノ業平ノ」ハ伊勢ニヨリテ書ルモノ也」と注する付箋がある。（この伊勢物語も出典考等不載。）

七

信友の他の多くの著作の例に違わず、この信友校本にも何箇所かの書入れ付箋を有する。中にはすでにはがれて貼付場所不明のものもあるが、こゝではこれらの付箋および頭注・傍注のうち注意すべきものを掲げて、信友の今昔物語集研究の一斑を見ることとする。

巻十一第七語 付箋 古本事ヲ「トモヲ」ナド／書ル事ナシ

以下改ヘシ

古本対流布本の用字の差に注意したもの。この類の注記、他にもあり。「十二巻批校間事」では「シノヒキ」の五例を挙げた。

巻十四第六語 本文 国字ト云フ寺有リ（大系本三、285-9）

頭注 法花験記亦著聞集ニ乙寺トアリ

付箋 信云 越後国乙寺ト書ル乙ヲソノカミ国ノ暁字トシテ国寺トカケルモノニヨリテ／此語ヲ書ル

モノ也此書ノ根本ヨリノ誤也

古典大系本もまったく同じ解釈である。今昔編纂の「根本」からの誤りとの論断に注意せられる。

巻十五第四十二語本文 世ノ中ニ痲瘡ト云フ病発テ（大系本三、402-11）

傍注 続記卷十二聖武天皇乙亥閏十一月下云 自夏至

冬天下患痲瘡天死者多 俗曰痲瘡

訓みの証を字鏡集などに援くのは珍しくないが（巻廿七第廿八語「榮字鏡集」など）、続紀を引くこの例などは注目に値する。

巻二十第十語 本文 此、宝ノ山ニ入テ手ヲ空クシテ出、石ヲ抱テ深

キ淵ニ入テ命ヲ失フガ如シ(大系本四、165-7)

朱頭注 涅槃經

第十七語 本文 然ハ人ニ食ヲ施スル功德量无シ、又不施サル罪

如此シ(大系本四、178-1)

朱頭注 施食獲五福徳經

この兩条、共に章句の出典を経文に求めたもの。

卷二十四冒頭

付箋

此卷ト覺タリ 和(我)纜トイ本ヲ以テ校シタリキ

シカルニ十九ノ第五語ニモ和纜(二) 二(朱) 意ト

キコトアリ シカレハ和ヲ我トアル方ハワロ
キ也 可考

校し終えて後に改訂の心覚えとしたものであろう。卷二十四ではなく

卷二十三(第二十語)の覚え違いのようであるが、厳しい学問の良心な

いし改善進歩への強い執着心に打たれる。

卷二十七第四語 本文 彼レハ誰ソ時ニ成レハ(大系本四、182-14)

頭注 ○タソカレは夕 ○カハタレは朝 中古ノ遣ひ

さま

同義語の使用場面の相違を付記したもの。基本的な語釈態度として注

意せられる。

卷二十九第廿一語本文 弓□シテ(大系本五、173-5)

頭注 信案 弓ノ下ノ空ハ ハヅシテ ナルベシ 真

字ヲオモヒ得ズシテ記者ノシバラクアケテオキ
タルナルベシ 弓共皆 ノ下ノ空モ全シ

いわゆる意識的欠文説である(「今昔物語集における欠文の研究」。た

ゞし、この例は数えておられないようであるが)。ハヅスは池上洵一氏の

いわれる共通欠文の代表例の一つでもある(「欠文の語るもの」ハ文学

頭注 欄ノ借字

「屋代翁ノ考」と傍注があつて塗抹してある。屋代翁は弘賢を指すの

であらう。「借字」という術語に注意せられる。同話の「敢テ片ナム

者」(245-16)の「片」を「行」に作るのに「行」を傍書して「行ハ

片ノ古体」とも注する(大系本校異四四)。

第廿七語には「昔ハ失スル人ヲハ云々 信云 ソノカミ□火葬シテハカ

シキノ墓モ作ラサリシカ多カリシナルヘシ」(大系本五、201-7)との、

民俗学的なメモも見られる。本格的な著作ではなく恐らく本文対校のついで

の覚え書きに過ぎないであらうから、もとより、体系的な研究とは言いが

八

信友校本卷二十八第卅七語には、次のとき語句が書出されている。

綾蘭笠 夏毛ノ行勝 打出ノ太刀 筋黒ノ胡録 雁股
征矢 所々革巻タル弓 法師髪馬

この箇所だけで他に例の無いことではあるが、信友がこうした武器の類に

注意したことが知られる。一般に問題語句の抽出は語彙研究の基礎作業で

あつて、今昔については国文注釈全書に翻刻された小山田与清(二七八二

一八四二)の『今昔物語語訓(旧本今昔物語語説)』のほかに大東急記念文庫に

蔵する横山由清(一八二六—一八七八)の『今昔物語語索引(今昔索引)』上下

二巻や静嘉堂文庫に蔵する『今昔物語難字説方』等が知られている。こ

とに「今昔索引」は五十音順に整理され、用例文を従え、時に頭注を加え

(和名抄—アラナ・字鏡集—勁刷—徒然草—くさめ・東大寺要録—五斛納金・竹

取・盛衰記—喬平など)、異体字・難読字や所名・地名・国名、さらには

共通形容(類句)などをも類集して貴重である。

ところで、伴信友にも『今昔物語集異訓字』と題する難語句集がある。

仮綴十丁、識語もなく、何時ごろどこでの編著であるか知る由もないが、

あるいは校本奥書にいう天保二年の批校時、ないしはその直後に成つたも

のかと思われる。信友校本を検してもゆく間に無雑作に袋綴の中に挿まれ

ていたのを見出でた時は無上の感激であつたが、その後所在不明との事で残念である。返す／＼も写真を撮るべきであつたと悔まれる。忽々の間の書写であるので誤り無きを保しがたいが、その第一丁を示せば次のごとくである。

仰ケ奉テ十二の十五オ

○適々廿八の十七ウ

懣^{ニクミ}テ 十二の十六オ又廿一オ 懣ム心ニテ 十三の五十七ウ 十四の四十ウ
廿三ノ廿九ウ 十六の六十三オ ○廿九の卅二オ

懣^{ニクミ}氣^{ニクミ}廿八の五 心懣^{ニクミ}ク ○廿四の四十二ウ ○廿八の廿九ウ四十九オ
十九ウ ○三十の十八ウ

諍^{ニクミ}フ 十二の廿ウ ○恐クム 廿八の
十一オ

逆ル音十二の五十六オ ○恐々ツ三十一の廿六オ三十四オ

白地^ニ 十二の廿一オ ○巾^ヌヒツ、 廿八の
白地目 三十の卅二ウ 四十一ウ

讃^{ニクミ}メ貴^{ニクミ}ビ十二の廿一オ ○讃^{ニクミ}メケリ廿四の卅四オ 讃^{ニクミ}メ喩^{ニクミ}レル廿八の三オ

裁^{ニクミ}也 十二の廿一オ又廿三ウ ○炮^アラル 廿八の四十ウ (ニオ)

弊^{ニクミ}クシテ 十四の一ウ 弊^{ニクミ}ク被^{ニクミ}試^{ニクミ}テハ 廿四の十四オ ○廿八の廿五ウ 卅
十六の四十ウ 六の廿二ウ

曲^カリ 十四の三オ 廿八の十ウ
二十の二ウ

艶^{ニクミ}ヌ 十五の四十九ウ 又六十五ウ 廿四の廿八ウ
廿四の廿一オ 廿八の四十三ウ又七十二オ

微妙^{イミシ}キ光^{イミシ}リ 十五の五十ウ 又六十六ウ 微妙^{イミシ}クシテ 廿四の廿八オ
廿九の四十五ウ ○三十の一オ 廿八の六ウ 三
十の廿一オ

器^{イカメシ}量^{イカメシ}クテ十六の三十五ウ

差^{ツカヘ}シテ十六

愕^{イミシ}タ、シク叩^{イミシ}ケレバ廿四の十五ウ

本書自体が卷十一以降であるから、この異訓字にも冒頭に断る通り天然・震旦部からの抽出が見えないことは言うまでもない。また、すべてに付訓があるわけでもないところを見ると、無訓の語句は訓みを保留したものであるであろうか。「懣^{ニクミ}テ」に「懣ム心ニテ」「心懣^{ニクミ}ク」「懣^{ニクミ}氣^{ニクミ}」などを、「讃^{ニクミ}メ貴^{ニクミ}ビ」に「讃^{ニクミ}メケリ」「讃^{ニクミ}メ喩^{ニクミ}レル」「弊^{ニクミ}クシテ」に「弊^{ニクミ}ク被^{ニクミ}試^{ニクミ}テハ」、「微妙^{イミシ}キ光^{イミシ}リ」に「微妙^{イミシ}クシテ」を序でるなどの、同類語句の類集に注意せられる。以下次のごとき語が挙げられている。

奇^{アヤ}異^{アヤ}ク 懣^{ニクミ}レリ 蔑^{アタ}リ奉^{コソリ}ル 挙^{コソリ}テ 令^{コソリ}拵^{コソリ}給^{コソリ}フ様ニテ
懣^{ニクミ}リ 懣^{ニクミ}ム様ニ 焰^{アタ}力^{アタ}也 端正ナルニ 教^{コソリ}へ進^{コソリ}ラム 喙^{コソリ}

長^{オナ}シキ男^{ニクミ} 泛^{アフレ}ニ泛^{アフレ}テ 懣^{ニクミ}ク 懣^{ニクミ}カリテ (頭注「イミシ」と訓
か好^{オコソリ}く当^{オコソリ}る」) 棍^{オコソリ}ケル 掘^{オコソリ}抜^{オコソリ}キニ ヲウト叫^{オコソリ}テ 叫^{オコソリ}ブ 複^{オコソリ}ラマ

シ 複^{オコソリ}ラカ 喘^{オコソリ}タキテ 嘆^{オコソリ}スヒ嗽^{オコソリ}フ 髪^{オコソリ}ニ 火^{オコソリ}髻^{オコソリ}ニ
取^{オコソリ}リ疏^{オコソリ}ヒ (線にて囲む) 寝^{オコソリ}引 心^{オコソリ}ヲ倦^{オコソリ}ハムガ 鉉^{オコソリ}隠^{オコソリ}レテ居^{オコソリ}タリ

鉉^{オコソリ} 娥^{オコソリ}ク勞^{オコソリ}タシ 可^{オコソリ}咲^{オコソリ}キ 抚^{オコソリ} 飼^{オコソリ}フ 月^{オコソリ} 懣^{オコソリ}ク見^{オコソリ}エケリ (三オ)

香^{オコソリ}馥^{オコソリ}リ句^{オコソリ}ヒ 座^{オコソリ}神^{オコソリ} 稔^{オコソリ}ハ、シ氣^{オコソリ}也ケル 糸^{オコソリ}稔^{オコソリ}ハシキ 無^{オコソリ}限

豚^{オコソリ}シ氣^{オコソリ} 簪^{オコソリ}キ 位^{オコソリ}臥^{オコソリ}ニケリ 低^{オコソリ}ニ 待^{オコソリ}叫^{オコソリ}ビまた叫^{オコソリ}テ物^{オコソリ}云^{オコソリ}フ
愕^{オコソリ}テ 愕^{オコソリ}テ泣^{オコソリ}ク 愕^{オコソリ}タ、シ 白^{オコソリ}墓^{オコソリ}无^{オコソリ}キ者^{オコソリ} 御^{オコソリ}身^{オコソリ}馥^{オコソリ}シキ

馥^{オコソリ}クニホハセ 杖^{オコソリ}ニ撻^{オコソリ}テ出来^{オコソリ}テ 智^{オコソリ}リ 馥^{オコソリ} 取^{オコソリ}テ 馥^{オコソリ}穿^{オコソリ}テ
馥^{オコソリ}ノ 態^{オコソリ}ハ何^{オコソリ}ゾ 喩^{オコソリ}リ騒^{オコソリ}ギ 喩^{オコソリ}ル事 喩^{オコソリ}合 江^{オコソリ}ヲ護^{オコソリ}へ

鑽^{オコソリ}フミ杙^{オコソリ}テ 注^{オコソリ}シニ 注^{オコソリ}シニシテ 喬^{オコソリ}立^{オコソリ}テル石 喬^{オコソリ}也 差^{オコソリ}
喬^{オコソリ}リテ 喬^{オコソリ}ニ居^{オコソリ}テ 喬^{オコソリ}取 喬^{オコソリ}平 一^{オコソリ}滴^{オコソリ}ク 蔽^{オコソリ}氣 傳^{オコソリ}シジ

キ 掩^{オコソリ}タル 臨^{オコソリ}ケハ 啼^{オコソリ}ク 穢^{オコソリ}ナ 各^{オコソリ}テ 搔^{オコソリ}蟠^{オコソリ}テ
弥^{オコソリ}ヨ嗅^{オコソリ}ケリ 艶^{オコソリ}ズ 嗟^{オコソリ}シ 焦^{オコソリ}レテ 充^{オコソリ}テ 極^{オコソリ}ク 切^{オコソリ}リ

則^{オコソリ}フニ 湿^{オコソリ}シテ 被^{オコソリ}俸 侶^{オコソリ}シテ 弊^{オコソリ}キ事 極^{オコソリ}ク和^{オコソリ}キ

此^{オコソリ}奴 壻^{オコソリ}タリ 氣^{オコソリ}六借^{オコソリ}ク 強^{オコソリ}顔^{オコソリ}キ 倡^{オコソリ}テ 掲^{オコソリ}焉^{オコソリ}クシテ
不^{オコソリ}審^{オコソリ}ク 抗^{オコソリ}タル事 器^{オコソリ}量^{オコソリ}カリケリ 器^{オコソリ}量^{オコソリ}ク 龍^{オコソリ}タル

絡^{オコソリ}々ト 痢^{オコソリ}ル 痢^{オコソリ}レ 駢^{オコソリ} 軫^{オコソリ} 透^{オコソリ}ヤカ 昨^{オコソリ}也 身^{オコソリ}毛^{オコソリ}羸^{オコソリ}
誘^{オコソリ}ヘ 嫉^{オコソリ}カリケレ共 白^{オコソリ}地^{オコソリ}ニ 渠^{オコソリ} 道^{オコソリ} (以下略)

『今昔物語語訓』の約六八〇語に比すれば半数以下に過ぎないが、それは本朝部のみであるせいもある。比較的巻ごとに集まっている部分もあるが（たとえば五〇ウは卷三十一が主）順不同であり重複もあつていかにも倉卒の間の仕事のように思われる。しかも単なる難訓語彙集にとどまり、その点では高田与清のそれと同じく語彙研究としては初歩的段階に過ぎないものであろう。しかしこの今昔物語集異訓字の仕事は、校本作成から一步を進めた基礎研究であることは確かである。あるいはこの基礎作業が浩瀚な信友の他の著作の中に役立てられているのかも知れないが管見の及ぶところではない。ともあれ、前述の出版研究や注釈的研究と共に、書写・対校作業を通じての本文研究に加えて、語彙研究の面でも新しい研究の芽を用意しているところに、学究信友の真面目を見るべきものと思う。あるいはこうした用意が、たとえば橘守部の『俗語考』²³に見られるごとき、語彙研究における今昔用語の積極的な活用を誘発せしめたものかとも思われる。

* 23 天保十二年十一月十四日序、たとえば次例のごとし。

○あしのむくかたにゆく 竹取「いづちもくあしのむきたらん方へいなんとす」大和物語^{五十}「おやにもはらからにもくまれば、あしのむか・かた・へゆ・かんとて、人の国へなんいきける」今昔十九^丁又十一^丁 卅一^丁十四等にも此詞出たり。

○いちもち 逸物也。人にもいへり。言の意、実は一物なるべし。空穂、春日詣「……」今昔廿五^丁「逸物」同廿八^丁「哀レ一物ヤ」並テ馬ニイヘリ。

○うちまき 今も米をうちまきと云是也。空穂藤原ノ君^{二十}「……」同あて宮「……」源氏横笛「……」大殿祭詞云「……」とある古きならはしより云つたへたる也。……今昔物語十四、散米して鬼の退し事を云る所に「ウチマキノ米ヲツカンデ投カケルニ、此ノワタル物ドモ、サトウセニケリ」とも見えたり。

九

以上、本稿は、小浜市立図書館酒井家文庫に蔵する伴信友校本の今昔物語集を調査した結果、学界に公けにすべき事がらを紹介することを主とし

て、伴信友の今昔物語集研究をめぐる若干の考察を付し、今昔物語集研究史へのいさゝかの寄与を志したものである。

要点をまとめれば次の通りである。

一、伴信友は天保二年五月に校倉本（系統）の今昔物語集十八冊を書写せしめ（惣目と本朝部）、塙本等異本三、四部、および印本（井沢長秀刊本）と対校したこと。

二、天保四年正月、奈良本（鈴鹿本）卷十二を借り得て批校、虫損・欠文等の研究から、鈴鹿本が現存写本類の祖本であることを論断したこと。（付、東大図書館蔵の長沢伴雄本はこの時点での信友本の転写本であること。）

三、天保十五年三月、鈴鹿本に再会し得て、卷二十七・二十九を対校、紙端の書入れを発見して、鈴鹿本が東大寺（新造屋）における書写であることを推論したこと。（付、筆者の調査によれば、同種の書入れが計五ヶ所見られ、いずれも書写直後、装本以前の校合に従事した総六丸のものと認められること、また、卷二十七第二十一話の裏書は、今昔読者としての最初の評言と目されること。）

四、出版研究においても、信友校本には『出典考』に比肩し得るほどの出典注記が見られること。また、信友自身の付した注釈的研究も少ないこと。

五、『今昔物語集異訓字』十丁の編著があり、語彙研究の面でも積極的な姿勢のうかがわれること。

六、鈴鹿本今昔物語集研究に基くと目される所論がその著『仮字本末』等に見られること。

なお、信友と前後して今昔物語集に関心を持ち、それらの面で業績を挙げた研究者も少く無い。小山田与清・岡本保孝のほかはほとんど顕れていないが、本稿では橘守部・山川真清・横山由清等に触れるところがあつた。また、今までまったく顧みられなかった東博本『今昔物語標目探考』や大東急本『今昔物語索引』等を採用上げることができた。いずれも今後の課題であらう。

（四八・一・七稿、七・九補）

付記 今昔物語集研究の道にお導きくださった山田忠雄先生の学恩、ならびに、

鈴鹿家はじめ小浜市立図書館・東洋文庫・静嘉堂文庫・大東急記念文庫・無窮会・東京大学附属図書館・東京国立博物館・国立国会図書館等の関係各位のご深切に感謝いたします。

なお、本稿の五を主として、昭和四十八年度説話文学学会大会（於、慶応大学）において発表しました。発表を勧めてくださった西尾光一氏、ならびにご意見をいただいた国東文麿・馬淵和夫・池上洵一の各氏はじめご出席の方々に感謝いたします。

追記 本稿は、昭和四十八年七月二八日、さる学術誌に投稿・受理されたのですが、組版の都合等で延引今日に及びました。その後、説話文学会での発表部分を抄出し撰者に関する若干の考察を加えて『国語国文』（京都大学）第四四巻第一〇号に発表いたしました。旧稿に属する本稿も捨てるにしのびず、一部の復をもいとわず、この度本誌に掲載を願うことゝいたしました。

『国語国文』誌の方も併せて、大方のご叱正を仰ぐ次第です。

（五〇・九・一三）

〔付言〕 余白もあるので、校正に当って付言することを許されたい。追記にも述べたようにこの原稿は起草以来いくばくの過程を経たのであるが、「伴信友の鈴鹿本今昔物語集研究に導かれて」と題して『国語国文』誌に発表させていたといった小稿は、幸いに学界の迎えるところとなり、ことに馬淵和夫氏は早速に紹介の労をとって下さった。日本古典文学全集第34巻『今昔物語集

（4）（小学館刊）月報51所載の「今昔物語集の成立」がそれである。原本（草稿本）の清書本としての鈴鹿本が東大寺書写であるとすれば、その撰述もまた東大寺でなされたと思われるべきが自然であり、その際、今昔の出典の一つでもある『弘法法華伝』奥書の筆者・東大寺東南院々務寛樹を撰者に擬せられはしまいか、とした小論の主旨を、私などよりもずっと以前から鈴鹿本を見て来られた立場から「まず正鵠を得たものであらうと思われる」と述べて下さったことは、まことに有難い極みである。言われるような「武士団の説話がいかにか撰者の情報網に入ってきたか」の問題を初めまだ／＼分らないことばかり、寛樹を洗う仕事も一向に成績はあがらず、今昔物語集の成立については、とても私などの手に負えそうにもない難問題が山積している。大方のご示教をまつばかりである。

なお、同じく月報51には国東文麿氏が「まぼろしの『今昔』」と題して、

本稿の二に述べたごとき、今昔の特異な流传形態について注意しておられる（本稿は原稿通歴の過程で一度氏にもご覧に入れてある）。本稿四の信友批校記の注15にも触れたように、鈴鹿本に見える影しい虫損は鈴鹿本が管理不十分なまゝにかなり長期にわたって放置せられていたことを物語り、鈴鹿本以上に諸本に虫損部分の欠字の多いことは、鈴鹿本が世に出る以前にはほとんど人の目に触れなかったことを物語る。以下はまったくの想像に属するので本文ではさしひかえたが、今昔物語集は完成間近のある時点で撰述作業を中止せねばならぬ事情が起き、清書本（鈴鹿本）のみがひそかに某末寺にでも隠匿されることになったのではなからうか。そしてその特殊事情とは、今昔の内包する、おそらく当時としては異常なばかりのエネルギーが、あるいは旧勢力の忌避するところとなったことに起因するのではなからうか。第七・八・九代の東南院の院務はみな東大寺別当になったのに、続く第十代の寛樹がなっていない事実、その辺の事情にかゝるように思えて仕方がないのである。いづれにしても今昔物語集は、完成にいま一步のところである。まゝに終り、寺院を中心に文字ある層が拡大し知識人・学問僧が輩出した中世の長い時代を、文字通り日の目を見ぬ暗黒の中に蠶食にまかせて過すという特異な経過をたどったものゝごとくである。国東氏の言われるように、ゆめ、「まぼろしの書」を現実と錯覚してはなるまいと思う。一言蛇足を加えて、後考をまつ。

（五一・三・三一）

（印刷に際して、難字の前後に一格空きが出来たことをおわびします。）